

ノルマ

生誕 130 年記念特別展『西光万吉の表現』は水平社博物館と「不可視化への抵抗・〈職業と世系に基づく差別〉と〈日本美術史〉に関する研究」研究会（以下、研究会）との共催で開催いたします。当館で西光の美術作品を展示するのは一〇〇四年五月に開催した特別展「西光万吉の花鳥風月」以来、二十四年ぶりとなります。本展示は当館としては初めての本格的な美術展覧会となります。

西光万吉といえば、水平社運動家である、あるいは「全国水平社創立宣言」の起草者ということを知っている方がいると思います。しかし、西光が絵画や戯曲などの創作活動を行っていたということを知っている、さらにそれらの創作活動、特に絵画などの芸術作品に関して、西光がどのような作品や人物に

め立ち上がり、創作活動も再開していきました。

研究会は美術史、文化研究、歴史学、文学などに携わる研究者や学芸員による共同研究で、西光の美術表現や、地域住民との共同制作の彫刻などを多角的に研究し、大学、美術館、地域などで研究発表集会を開催することを通じて、研究内容を発信することを続けています。西光の作品は、確かな描写力に裏打ちされるとともに、独自の理論や着想が蓄積されています。

本展示の開催にあたり、西光万吉顕彰会・西光寺・立命館大学植田彩芳子さまの皆様に多大なるご協力とご尽力を賜りましたことをここに改めて深謝申し上げます。

西光万吉顕彰会では西光が晩年を過ごした家がそのまま保存され、西光の遺品とともに本展示では展示していない絵画作品を多数ご覧いただけます。西光の心を知ることのできる施設ですので、本展示と合わせてご見学いただければ幸いです（見学の際は予約が必要です）。

作プロセスや背景を紹介し、その独創的な制作をひもといていきます。編年が未確定であることなど、研究上の課題はありますが、西光が生涯にわたって実践した運動と制作の往復と、そこから表現を生み出すことの大切さを、本展示を通して感じていただければ幸いです。

また、西光がどんな思いで描いたのか、その思いを想像しながら展示をご覧ただくことで、これまで知っていた、または聞いたことのある西光とは違う一面を発見することが出来るのではないかと思つ

影響を受けたのかということまで知っている方はあまりいないのではないか。どうか。

西光は幼い頃から部落差別を受けていました。学校に通うようになつても差別はなくなることはなく、西光は差別から逃れるために転校を繰り返します。そして画家になる夢をかなえるため、京都で美術の専門学校に入学します。その後、東京に出て本格的に画家になるための活動を行つていきました。将来有望な若手との評価を受けるようになつてきましたが、過去に受けた被差別体験から部落差別を受ける恐怖心が大きくなり、最後は筆を折つてしましました。

しかし、故郷である柏原に戻った西光は様々な人との出会いやきっかけにより、部落差別をなくすた

また、西光寺は西光万吉の生家で、当館の向かいにあります。本展示ではこれまで非公開であつた西光寺所蔵の掛け軸やその下絵などを展示させていただき、また展示作品だけでなく西光寺お堂内の壁画の公開（十二月六日）もしていただきます。ここに重ねて御礼申し上げます。

水平社博物館
「不可視化への抵抗・〈職業と世系に基づく差別〉と
〈日本美術史〉に関する研究」研究会

西光万吉の絵画学習

文・植田彩芳子（日本美術史・立命館大学教授）

西光万吉（本名、清原一隆）の画業や日本画・洋画学習については、わからぬことが多い。本稿では、これまで推測で「言われてきたことを確認し、はつきりしていること、わからないことの整理を目的とする。

西光は「略歴と感想」^{★1}の中で自身の学歴、絵画修業について、次のように語っている。西光は奈良県南葛城郡坂上村柏原北方・西光寺に生まれ、七歳で坂上村立尋常小学校入学、その後同郡御所高等学校を経て、同県立敵傍中学校に入学するが、二年で中途退学、翌年、京都市平安中学校に移るも再び中途退学する。この頃より「画工」を志し、京都の関西美術院の「寺松先生」について洋画を学び、翌年には東京に行き、太平洋画会研究所で洋画を学び、日本美術院の「橋本先生」について日本画を習った。その後八年間ほど、奈良あるいは東京で、絵画の修業と読書の生活を続けた。

木村京太郎氏の編による「西光万吉 略譜」^{★2}によると、関西美術院に入ったのは一九一〇年秋頃で、一九一二年五月に、東京の太平洋画会研究所に入塾し、中村不折に洋画を学び、日本美術院の「橋本・岡先生」より日本画の指導を受け、同年秋の「国民美術展覧会」に上位で入賞となる。さらに一九一三年三月、二科会の画展に入選。一九一六年、「画商橋本氏より、大和めぐりの案内を頼まれ、また恩師岡先生から娘との婚約を求められたが、ともに部落出身がばれることをおそれ避ける。この頃より、（中略）画塾・下宿などから遠ざかり、上野図書館にて独学をはじめる」とある。しかし、国民美術協会展の出品目録および二科展の出品目録^{★3}を確認しても、「清原一隆」もしくは「西光万吉」の名を見つけることはできない。

また、現在確認できる「関西美術院入学者名簿」^{★4}にも、その名を見つけることはできない。しかし、この綴りについては、全ての入学者を網羅しているとも限らず、ここに掲載されていないとも関西美術院との関わりを

持った学生は存在している可能性が指摘されている^{★5}ことから、関西美術院で「寺松先生」こと寺松国太郎に学んだことは事実と考えてもよさそうだ。

寺松国太郎（一八七六—一九四三年）は岡山出身の洋画家だが、一九〇六年に関西美術院に入り、一九〇八年には同院の教授に就任している。時期的にも、西光の「略歴と感想」の内容と齟齬はない。そして、寺松は「坦斎」と号して日本画も多く描いた。『一家一彩録』^{★6}に寺松のインタビュー記事が掲載されている。それによると、寺松の日本画は独学だったが、余技というよりはかなり本格的なものだったようだ。寺松は、日本画の方が「光線の、陰影の、遠近法など、面白いことを云はずとも其気分を十分あらはし得る」ので、「日本画の筆墨主義には賛成で、何か描て見ると日本画の筆致を見せたい」と述べている。こうした寺松の作画態度の影響を受けたのだろう、西光は上京して洋画を学ぶ一方で、日本画を学ぶことになる。

木村氏の「略譜」によると、一九一二年五月に上京して太平洋画会で中村不折に学んだとあるが、寺松国太郎も一九一〇年から一九一二年まで太平洋画会会員として展覧会に出品をしている^{★7}。西光が上京したとされる一九一二年を最後に、寺松は太平洋画会展への出品をしていない。その頃、西光が太平洋画会研究所に入り、中村に師事したとされるが、もしそうならば寺松の紹介の可能性も考えられよう。しかしその後の西光は、寺松とは離れることになったようだ。

西光の日本画学習について、『日本美術院百年史』（日本美術院）を調べても、その名を見つけることは難しい。「橋本先生」とは橋本雅邦門人の橋本静水か。木村氏の「略譜」に出てくる「岡先生」とは芳崖四天王の岡不崩なのか。木村氏の「略譜」に出てくる「岡先生」とは芳崖四天王の岡不崩なのか。一九七八年の土方鉄氏による「水平社運動の人々」^{★8}には、西光が「日本文化史大系 第12巻」（新光社、一九五五年）などが残されている。昭和期に入つてからも、絵画に幅広い関心を持っていた様子が見られる。特に、『世界文化史大系 第12巻』（新光社、一九五五年）などは図版部分が切り抜かれている頁が多数あり、西光が絵画学習に使つていた様子をうかがうことができ、興味深い。

以上、簡単にではあるが、現在の調査状況をまとめた。今後、より多くの人に西光の画業が注目され、研究が進展することに期待したい。

本美術院の橋本清水^{★9}、岡洛陽^{★10}らに日本画を学んだ」とあり、一人は静水のことと思うが、「岡洛陽」については該当する日本画家を見つけることは困難である。その後、太田善照氏^{★11}は「橋本先生」は静水か永邦かと推測されるが、記録は無いと指摘、『没後30周年記念 西光万吉展』図録^{★12}では、静水に学んだとされる。このように「橋本先生」「岡先生」については特定できる資料がなく、どうやら推測で静水だろうと想定されてきたようである。

ここで注目したいのは、西光による「森で遊ぶ人たち」という仮題を持つスケッチである。林の中でたき火をして休む三人の農婦・農夫とその傍らに馬が描かれる。よく見ると、「多門」の朱文印が捺されている。日本美術院の雅邦門下に山内多門（一八七八—一九三三年）という日本画家がいる。はじめ川合玉堂に学んだという多門には、林の中に小さく農夫・農婦を描く構図の作品が見られる^{★13}。こうした憩う農夫・農婦の様子というのは、玉堂の作品にも見られる。多門作品の描写はより緻密で、このスケッチは多門自身のスケッチとは考えにくい。しかし、多門の絵を西光がスケッチしたものである可能性は考えられる。もしそうだとするならば、この絵は、西光による日本美術院の、雅邦門下の先輩画家の絵のスケッチということになる。ここで、日本美術院および雅邦一派と西光の関係が繋がってくる。あくまで可能性はあるが、興味深い作例である。

西光のスケッチについては、今回展示に関わる調査でさまざまな古画を模写したスケッチを確認した。例えば、スケッチブックには「月懶」（江戸中・後期の画僧）や「山樂」（狩野山樂、江戸初期の京狩野の絵師）の名前が記されている。また、近代京都の日本画家である幸野模嶺の『千種之花』（一八九〇—一九年）、今尾景年の『景年花鳥画譜』（一八九一—一九二一年）に学んだ克明なスケッチも残されている。

西光の旧蔵書の中には、



西光万吉 《森で遊ぶ人たち》
西光万吉顕彰会蔵

^{★1} 青木茂監修『近代日本アート・カタログ・コレクション』太平洋画会 第2巻
ゆまに書房、二〇〇一年。

^{★2} 木村京太郎編『西光万吉 略譜』『西光万吉著作集 第2巻』濤書房、一九七四年。

^{★3} 『近代日本アート・カタログ・コレクション』（ゆまに書房）の「二科会 目録編」、『国民美術協会』を調査した。ほか、「太平洋画会」「春陽会」も調査したが、掲載はなかった。また「文展・帝展・新文展・日展出品歴索引」（明治40年—昭和32年）（日展、一九九〇年）にも掲載はなかった。

^{★4} 「関西美術院入学者名簿」「浅井忠と関西美術院展」図録、府中市美術館ほか、二〇〇六年。

^{★5} 同前（凡例部分）。

^{★6} 黒田天外「寺松国太郎氏」『一家一彩録』国書刊行会、一九一〇年。

^{★7} 青木茂監修『近代日本アート・カタログ・コレクション』太平洋画会 第2巻

^{★8} 土方鉄「水平社運動の人々」「人物探訪・日本の歴史」19、曉教育図書、一九七八年。

^{★9} 太田善照編『西光万吉の絵と心』大阪人権歴史資料館ほか、一九九〇年。

^{★10} 『没後30周年記念 西光万吉展』図録、没後30周年記念「西光万吉展」東京実行委員会、一〇〇〇年。

^{★11} 例えば『山内多門画集』（山内多門画集刊行会、一九三六年）に掲載の「日光大平臺」（No.7、一九〇九年）および「落葉」（No.69、一九二一年）など。多門については、『生誕130年展 山内多門』図録、都城市立美術館、二〇〇八年、参照。

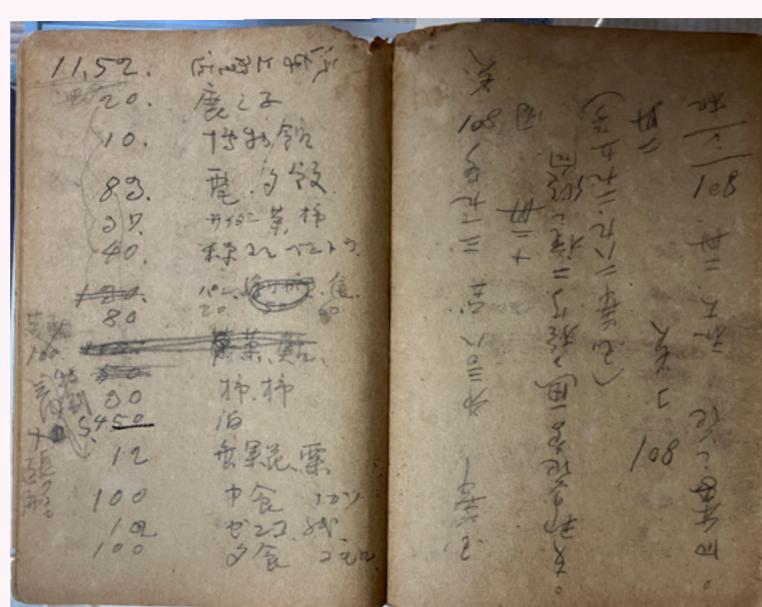
文・加藤弘子

若き西光が綴った文集とノートは、これまで知られていない、美術家としての姿を伝えてくれる。

『小品文集』(図1)は、表紙の上部に髪を美豆羅に結った聖徳太子孝養像の顔が描かれ、下にはギリシヤ神ヘルメスを思わせる杖を持つヌードの青年立像が描かれる。「スケッチまん画ハガキ文スケッチ文」と書き添えたように、西光は小さな作品集を作ろうとしていた。表紙を開くと「幼時の印象」と題して幼子の顔が描かれ、西光が五、六歳だった頃、冬の寒い夜に父の帰りを待つていた想い出が随筆、すなわち「スケッチ文」として綴られている。さらに頁を開くと「大至急」とカンカン帽を押さえて走るスース姿の男の1コマ漫画などが描かれる。

未完の文集ではあるが、差別と病気のために中学を中途退学した[★1]西光には、父への感謝と報恩の思いがあつたことがうかがえる。表紙の太子像は用明天皇の病氣平癒を祈る親孝行な一六歳の姿であり、ヘルメスは使者として父ゼウスを助け、自信に溢れた青年の姿で表現される。二つの像を十代の若き西光が抱いた理想の自画像として見ることもできるだろう。西光は一九一一年、一六歳の秋に寺松国太郎に洋画を学んでいる[★2]ので、「小品文集」制作はその前後の可能性が考えられる。東西の絵画、漫画、隨筆が西光の創作の初期にあつたことを示す、貴重な作品である。その後、西光は「画工」を志して上京し、太平洋画会研究所や日本美術院の画家に学ぶ[★3]が、一九一六年、二十一歳の頃に部落出身と知られることを恐れて画塾を離れ、上野の帝国図書館で独り学び始めた。この頃に使っていたと思われる学習用「ノート」(図2)[★4]には学術誌『國華』全一二冊(一九一六年)、田中豊蔵「支那の花鳥画に於ける二種の傾向 上・下」(『國華』二八九・二九五号、一九一四年)、さらに浮世絵美人画の喜多川歌麿『四季の花 上・下』(一九一六年)が図書館の請求記号などとともに記され、西光が最新の学術誌を参考し、中国の花鳥画から日本の浮世絵まで、幅広い関心をもって学んでいたことがわかる。

このノートは郷里と東京で絵画修業と読書を続けたとの西光の回想を裏付ける記録で、日付は不明であるが、隣の頁には上京時の支出メモがある。西光は上野まで汽車に乗り、米原で弁当を買い、サイダーや菓子、無花果・栗・柿といった果物からみて、季節は秋である。上野で博物館を十銭で観覧した後は長野、小諸まで足を延ばしたようだ。ノートの片隅に「長くゐて過働(長く居て働きすぎ)」と記した、西光の懸命な絵画修業を伝える重要な資料である。



★1 西光万吉「略歴と感想」『西光万吉著作集 第1巻』、濤書房、一九七一年、八六頁。
★2 同前。
★3 同前。
★4 軍艦印で、「日本ノート会社製造」「定価金五銭」と印刷されていることから、中村寅吉が社長を務めた一九一六年創立の日本ノート製造株式会社製で、一九一七年頃に販売していたノートと判断した。『日本印刷界』八九、日本印刷界社、一九一七年三月、六七頁。たまたま「[連載] 文房具百年 #6 学習ノートとノートのよきもの 後編」、『文房具のとびら』、二〇一八年八月二〇日、URL <https://www.buntobi.com/articles/entry/series/tainichi/007992/>、二〇一九年一〇月二〇日最終閲覧。



図1 西光万吉《小品文集》水平社博物館蔵

現存する絵画の作例を見る限り、西光は人物画を最も多く描いている。今回、代表作《毀釈》や《蘭陵王》のほか、《髪を梳く女》の下図（図1）を確認することができた。

《髪を梳く女》は一九九四年の「西光万吉」展に初めて出品され、注目を集めた作品である〔★1〕。着物姿の女が鏡台の前で片膝を立てて座り、櫛を手にして結い上げた髪を整えている。着物の描写とともに、左右に張り出した燈籠鬚と呼ばれる、透けるような髪型の表現が見どころの1つである。

下図の留書には「鳥居清長 燈籠鬚ハ宝暦の頃より関西にて初められ戸にも伝りて安永より寛政頃まで」と、浮世絵師・鳥居清長の名と燈籠鬚の流行が記される。西光が参考にしたのは鳥居清長の《色競艶婦姿 髮結い》（図2）である。清長の図では女は両手を挙げて胸をはだけた姿であったが、西光は片膝を立てて櫛を持つ右手で胸を自然に隠す姿勢に変え、上品な仕上がりにした。また、下図では着物は桜の柄、帯は赤を構想していたが、本画では桜を帯の柄に、赤を着物の地色にして麻の葉文様に変更する工夫をしている。背景には初期の代表作「醍醐の花見」が描かれたとみなされているが〔★2〕人物の図様は異なっている。

《醍醐の花見》（図3）は水平社創立の一九一二年以降、幼なじみの阪本精一郎のために制作した戸襖である〔★3〕。鳥よけの護花鈴が揺れる満開の桜の下、踊りと宴を楽しむ人々の姿が描かれ、丁寧な線描と彩色が画面の隅々まで行き届いている。さまざまな風俗画を参照したと推測するが、鏡像のように反転した形で向き合って踊る四人の図像は《舞楽図屏風》（日光山輪王寺）の舞人を想起させる。

西光の絵画資料には襖絵や人物画に関する一枚の覚書（図4）がある。「襖絵選集 宗達画集 東洋美術大観 桃山期 人物に於ける描線 衣服と顔面の線 樹木の着色 金泥たらし込と岩物との関係等 特に注意」と墨で書かれている。前半は襖絵制作の参考に控えた画集と美術全集〔★4〕、後半は人物画における線描と樹木彩色の注意事項で、「たらし込」とは俵屋宗達（図5）。

こうした人物画の旧蔵者は故郷の仲間や支援者で、西光は和榮運動の資金を集めるために画会も開催した。西光の漫画への評価はあるが、彼の絵画は「売り絵」とも評され、研究では重要視されていない〔★7〕。しかし、こうした絵画こそが西光の人権・平和活動を支えていたのであり、そこに目を向ければ、私たちが見落としてきたものがあつたのではないだろうか。（図5）。

★1 「西光万吉―『熱と光・和榮』を求める生涯」展、大阪人権歴史資料館、一九九四年。
〔仮称〕水平社歴史館 建設推進委員会編『図説水平社運動』、解放出版社、一九九六年、一四〇頁。

★2 同前。

★3 制作年については一九二二年の水平社創立直後とする文献が多いが、昭和初年、一九二六年との記述もある。朝日新聞社編『人ありき――六十七人伝』朝日新聞社、一九七二年、三〇一頁。

★4 出版社と刊行年は以下のとおり。『襖絵選集』上下、日本美術学院、一九二〇年。『宗達画集』、審美書院、一九二三年。審美書院編『東洋美術大観』全一二冊、審美書院、一九〇八—一九二二年。

★5 「たらし込み」については本田光子氏にご教示いただいた。青琅玕（田中喜作）「俵屋宗達筆 横檜図」（『美術研究』2、一九三二年）および、谷信一「宗達筆秋草図屏風に就て」（『国華』五〇五、一九三二年）。なお、結城素明「書法總説『新美術講座日本画科第2巻』（発行年不明）を一九二八年とする説もある。林樹里「たらし込み」と「にじみ」の実証的研究－基底材との関係－」、芳泉文化財団日本画・彫刻文化財の保存修復の研究助成 平成30年度助成研究、https://www.housen.or.jp/common/pdf/30_02_hayashi.pdf 一〇二五年一〇月一七日最終閲覧。

★6 三井万里・芳川赳『彩管をもつ人に』、文明堂書店、一九二〇年、一四六・一八七・一九〇頁。

★7 足立元「水平社運動のマンガ 西光万吉が描いた熱と光」、『メディア芸術カレント』、二〇二一年一月、URL <https://mac.bunkag.jp/339/> 二〇二一年一〇月一七日最終閲覧。



図5 西光万吉《醍醐の花見》部分

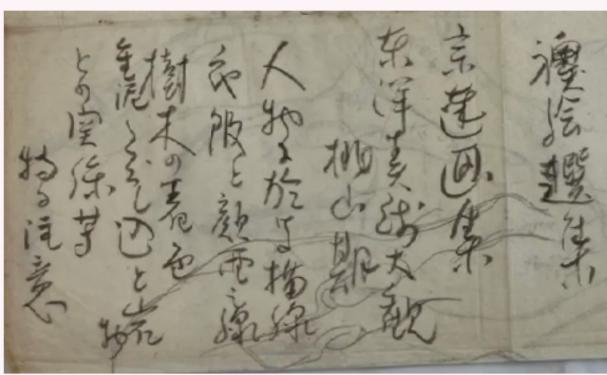


図4 西光万吉 覚書
西光万吉顕彰会蔵



図3 西光万吉《醍醐の花見》
水平社博物館蔵



図2 鳥居清長《色競艶婦姿 髮結い》
出典：立命館大学
<https://ja.ukiyo-e.org/source/ritsumei>



図1 西光万吉《髪を梳く女 下図》
西光万吉顕彰会蔵

西光が誰に絵画を学んだのかについては、まだ不明な点がある〔★1〕。しかし、彼が専門的な絵画教育を受けたことは、写生図や模写図、下図など自宅にまとまつて残された絵画資料から見て明らかである。

西光は《鴨図屏風》(図1)《紫陽花図》(図2)など円山派、四条派風の花鳥画を制作している。また、花鳥写生図の一部(図3・4)は、明治に刊行された幸野模嶺『千種之花』(図5)や今尾景年『景年花鳥画譜』(図6)など円山派、四条派の版本を臨写した図として、西光万吉顕彰会で展示されている。これらの版本は線描と留書が整理され、彩色は鑑賞用に配慮した鮮やかな仕上がりであるが、西光の図は線描が未整理で情報量が多く、彩色は一部にとどまるといった違いもある。

『景年花鳥画譜』の《ヤマニシキギ・イスカ図》(図7)を比較すると、『景年花鳥画譜』はイスカの雌の頭が白く、実際とは異なるが、西光の図(図8)は正しいオリーブ色である。また、西光は肩近くの白い部分に誤って羽根の輪郭線を描いたため「此羽誤也 白クヌル可(この羽は誤り。白く塗るべし)」と記している。版本より図の情報が正確で、写し間違いをメモしていることから、西光は版本ではなく、版本の原画の写し、画塾の画手本を写した可能性がある。

『千種之花』(図5)には彩色方法の留書があり、「くま取り」でばかりすることを「曲」、「草の汁」の絵具を「艸」と表記するのは、江戸時代から円山派、四条派の図の留書にみられる書き方だ。西光は図とともに文字の書体も似せつつ、版本とは異なる、画手本のような未整理な配置で文字を写している(図4)。参考した図と文字を尊重し、そのままに写そとする姿勢は、西光が専門的な絵画教育を受けた何よりの証しである。



図2 西光万吉《紫陽花図》
西光万吉顕彰会蔵



図5 幸野模嶺『千種之花』2、文求堂、1890年
国立国会図書館デジタルコレクション、
<https://dl.ndl.go.jp/pid/13212860>
(参照 2025-10-30)



図4 西光万吉《カノコユリ・細葉龍胆》
西光万吉顕彰会蔵

★1 足立元「水平社運動のマンガ 西光万吉が描いた熱と光」、『メディア芸術カレントコンテンツ』、2023年2月、URL <https://macc.bunka.go.jp/339/>、2025年1月17日最終閲覧。

★2 清原美寿子「西光万吉と絵」『部落解放と絵』120、一九七八年七月。西光万吉画集刊行委員会『西光万吉の絵と心』大阪人権歴史資料館、一九九〇年、八五頁。



図3 西光万吉《枇杷花・八十カラ図》
西光万吉顕彰会蔵



図1 西光万吉《鴨図屏風》
水平社博物館蔵



図10 西光万吉 スケッチブック 鷹図・鴨図・山樂筆雪柳図ほか 西光万吉顕彰会蔵



図7 今尾景年『景年花鳥画譜』冬之部、
ヤマニシキギ イスカ
桃葉衛矛・交喙図、西村総左衛門、1892年、
国立国会図書館デジタルコレクション
<https://dl.ndl.go.jp/pid/13127864>
(参照 2025-10-30)



図11 西光万吉 スケッチブック
松の新芽・花図ほか 西光万吉顕彰会蔵



図6 今尾景年『景年花鳥画譜』冬之部、
枇杷花・八十カラ図、西村総左衛門、
1892年、国立国会図書館デジタルコレク
ション <https://dl.ndl.go.jp/pid/13127864>
(参照 2025-10-30)



図12 西光万吉《松鷹図屏風》水平社博物館蔵



図9 西光万吉 スケッチブック 紫陽花写生図
西光万吉顕彰会蔵



図8 西光万吉《桃葉衛矛・交喙図》
ヤマニシキギ イスカ
西光万吉顕彰会蔵

西光万吉の表現について

文・小田原のどか（芸術学・横浜国立大学）

とともに郷里・御所市柏原に戻る。数年後、彼らは、賤視された被差別部落の人々が人間の尊厳と権利をうたい、差別からの解放を求める全国水平社の創設者となつた。

東京へ行った第一夜、初めての晩ですよ。太平洋画会の紹介で下宿に着いて、あてがわれた部屋に荷物をおろし、自画像を描いています。階下で下宿のおかみさんたちが話しているんです。

「新しいことが来ましたね。どこから来なんですか」「奈良県ですよ。奈良県には、名物が三つありますよ」「何でしょう」。ほかに下宿している人たちも話込んでいるんです。「ひとつは奈良の鹿。ひとつは奈良のおかゆ。あとひとつは、えたや。部落民や」というてるんですよ。私はその夜眠れませんでした。畠傍中学で差別を受けてやめ、故郷を離れれば、こんな差別的なことばを聞かなくてよいと思つて東京に来たのにその第一夜にですよ。寝られますか。（福田雅子『証言 全国水平社』日本放送出版会、一九八五年）

日本初の人権宣言といわれる「水平社宣言」の起草者のひとり、西光万吉（本名：清原一隆、一八九五—一九七〇年）が専門的な美術教育を受けた人物であることは、それほど広く知られているわけではない。この引用は、画家としての道を歩むため上京した西光が、東京で過ごす最初の夜に経験した差別についての証言だ。

一八九五年、浄土真宗本願寺派（西本願寺派）・西光寺に長男として生まれた西光万吉は、部落差別のため僧侶となることを断念し、「関西美術院」（明治三九年に京都市に創立された私設の洋画研究所）で学んだ。一九一三年春、本格的に絵を学ぶために東京に居を移した。東京での画業は順調であったようだ。しかし、パトロンとなつた画商からは娘との結婚を促され、画業の師からは奈良旅行の案内役と親の紹介を頼まれる。出自が知られるなどを怖れた西光は、画塾から遠ざかつた。心身ともに衰弱し、同郷の友人・阪本清一郎

も決された。「兄弟よ」という男性限定の呼びかけなどに顕著な水平社宣言における男性中心主義をめぐっては、一〇二四年三月、部落解放同盟は「ジョンダー平等に対する重大な問題点を抱えていた」とする見解を採択した。西光がしたため、仲間たちと磨いた水平社宣言は、いまなお社会の人権意識をうつす鏡として光り続けている。

二〇二二年、水平社宣言から一〇〇年の節目に当たり、私は西光万吉の作品を調べようと思い至った。きっかけは、晩年の自画像とされる掛軸《毀釈》の謎に惹かれたことと、冒頭の上野での出来事に心を揺さぶられたからだ。私は東京藝術大学の大学院に通っていたため、上野で過ごすことも多々あった。一〇〇年と少し前、同じ美術家としての志をもつて上京した者が、差別のために道を絶たれることがあっていいのかと、胸が痛んだ。

かくして、奈良県御所市の水平社博物館と、隣接する西光万吉の生家・西光寺、和歌山県紀の川市の西光万吉顕彰会を訪ね、西光作品の調査を行った。これを経て、「不可視化への抵抗：〈職業と世系に基づく差別〉と〈日本美術史〉に関する研究」研究会をかたちづくり、多様な専門家の方々と共同研究を始めた。調査で赴く先々でふれる西光の作品や、スケッチ類、試し書きなどからは、専業画家とはならなかつたものの、西光にとって創作が片手間ではなかつたことが窺えた。とくに、顕彰会に残されていた、西光が定期購読していた美術雑誌には、模写やコラージュに活用したとおぼしき痕跡があり、画業の研鑽を地道に積んでいたことが見て取れた。

そして、このたびの展覧会では、水平社博物館と、植田彩芳子氏、そして

加藤弘子氏の協力により、西光の画業の内実や絵画学習の背景に、よりいつそう、光を当てることができたのではないかと思う。

西光は美術を通して何を表現しようとしたのか。たんに「上手い絵」「美しい絵」を描こうとしたのではないだろう。すでに足立元の研究において言及されているが、西光は自身が関わる様々な活動に絵を活用した。絵の影響力を知っていたのだ。自身が表現したものを見ると、どうに見れるかという視点が、つねにあったと言える。

僧侶が仏像や仏具を焼いて暖を取る様子を描いた《毀釈》は、西光の自画像だといわれる。画家自身を描く自画像は、近代以前の日本にはほとんど見られない。明治以降、この国に西洋式の美術教育制度が立ち上げられるながらもたらされた自画像は、美術制度をつうじた近代的自我をめぐる実験の場でもあつた。

西光の自画像としての《毀釈》は、換骨奪胎の作だ。本作の主題は、禅画の画題「丹霞焼仏」である。丹霞焼仏は仙座や複数の絵師に描かれたほか、岡倉天心（覚三）『茶の本』にも引かれている。



仙座《丹霞焼仏》19世紀
個人蔵
西光万吉《毀釈》1960年代
西光寺蔵

《毀釈》において僧侶として描かれた西光は、丹霞和尚と同じく仏像を焼いた。しかしながら、その意味は反転している。丹霞焼仏の話とは、仏像など



仙座《丹霞焼仏》19世紀
個人蔵
西光万吉《毀釈》1960年代
西光寺蔵

出典：『へそまがり日本美術』講談社、2019年

我々は『人間に光あれ、人世に熱あれ』の願望を惟神道に求め八紘一宇の高天原展開に邁進せんとする」と書き、全国水平社を「國体の本義に基きて更に反省せよ」と批判した。戦後は侵略戦争を支持した己に厳しい反省を加えるが、天皇の責を問うことはなかった。天皇制のもとの不戦・平和思想の実践は生涯続いた。

吉本隆明は一九五八年、『現代批評』創刊号に「転向論」を寄せた。この方法論は、鶴見俊輔を発起人とする転向研究会のそれとは異なるものであつた。鶴見らは転向を「権力によって強制されたためにおいて思想の変化」と定義し、思想弾圧など外発的要因を重視した。一方、吉本が重視したのは内発的条件、すなわち自発性だ。このように、外発／内発の二項対立で転向を捉えることは妥当かを、西光の「転向」は問い合わせる。この西光の笑みは、転向の完遂への満足にも、転向それ自体への反語表現に取れる。

そしてまた、『毀釈』には獅子が描かれているが、一般的には獅子・狛犬は神社に置かれる。ゆえに、これと僧侶の取り合わせの異質さに目が向くが、焚き火の煙をたどって目線を上げれば、阿像の獅子が高笑いをしているように見える。獅子・狛犬が、もとは天皇の玉体守護の役割を持った存在である」とも、この作品に獅子が描かれた意味のひとつと言えるかもしれない。さて、本展で展示された『毀釈』の下図では、本画の背景として描かれた冬枯れの木に、梅のような花芽がほころんでいる。西光は丹霞焼仏を主題にして、これを初春の出来事として構想していたのだ。こうした下図との比較のほか、同じタイトルを持つも、まったく異なる構図で描かれ、西光万吉顕彰会に所蔵されている『毀釈』との対比も含め、本作については引き続き研究を継続する必要がある。

西光にはわかっていたのだろう。『毀釈』を前に、私たちがその謎に迫ろうとするのを。西光による表現は、画家としての西光の存在も、そして被

差別部落の存在も、これまで不可視化してきた日本美術史への一石になりうる。あの日、西光は自画像を描ききることができただろうか。西光に言葉をかけることはできないが、あなたの経験をなかつたことにはしないと、それだけは伝える。



西光万吉 《毀釈 下図》

西光寺藏

参考文献

- 『西光萬吉の絵と心』大阪人権歴史資料館、一九九〇年
師岡佑行『西光万吉』清水書院、一〇一六年
鶴見佑行『西光万吉』清水書院、一〇一六年
鶴見俊輔『鶴見俊輔集 4 転向研究』筑摩書房、一九九一年
吉本高明『マチウ書試論・転向論』講談社文芸文庫、一九九〇年
宮橋國臣『至高の人西光万吉・水平社の源流・わがふるさと』人文書院、一〇〇〇年
熊本理抄『被差別部落女性の主体性形成に関する研究』解放出版社、一〇一〇年
小田原のどか・山本浩貴編『この国（近代日本）の芸術：〈日本美術史〉を脱帝国主義化する』月曜社、一〇一三年
足立元『水平社運動のマンガ「西光万吉が描いた熱と光」、『メディア芸術カレント』』月曜社、一〇一三年一月、URL <https://macc.bunka.go.jp/339/>